

葬儀と村の「共同体」
--日本宮城県仙台秋保馬場村のフィールド調査--

Funeral ceremony and the village community

from the perspective Based on fieldwork in Baba mura, akiu-machei, Miyagi ken Sendai Japan

李 晶 (Li Jing)

広東海洋大学 (Guangdong Ocean University)

Abstract:

I found the "Baba mura "is not simple community, is a forme modern village community characteristics of the community. So, I think that isrelated to the cultural identity and the villagers. The "Baba mura" villagers'cultural identity is mainly embodied in the "public" and "private" in the village of ritual activities. Ritual activities of "public" refers to the village everyyear a large sacrifice and the festival day, ritual activities of "private" refers to the villagers' life by the etiquette of the individual, but here mainly refers to the village of the funeral ceremony. In this paper, the miyagi, Japan sendai akiu-machei at the funeral ceremony as the research object, to reveal the funeral ceremony role in sustaining village community.

キ ー ワ ー ド : 日本、集落、葬儀、社会、持続

Keywords: Japan, village, Funenal ceremony, society, continuation

はじめに

本論文において「村落共同体」という言葉を使用したが、まずそれについて説明していくことにする。百科事典マイペディアの解説によれば、共同体はコミュニティ（英語：community）とされ、英語で「共同体」を意味する語に由来する。同じ地域に居住して利害を共にし、政治・経済・風俗などにおいて深く結びついている人々の集まり（社会）のこと（地域共同体）である。三省堂『大辞林』の解釈によれば、村落共同体は前近代社会において、土地の共有や共同利用、農業生産および日常生活を成員の地縁的相互扶助によって自給的に行うことなどをもって営まれる共同体である。「村落共同体」は社会学者、歴史学者、農業経済学者、文化人類学者がよく使用する概念である。学者の村落社会に対する視角によって、その概念の解釈もそれぞれ違う。1970年代まで日本の学者の殆どは「村落共同体」の研究において、近代と「共同体」の二項対立の枠組みによって行い、「共同体」は封建的だと認識していた。封建性を脱するために「近代」は「共同体」を捨てるべきものとして捉える認識が主流であった。「地域社会の呼び名も1950年代までの共同体から、1970年代以降のコミュニティと変化してきた」（鳥越皓之 2007：154）。

1980年以降、日本の学界はポスト・モダニズムの影響を受けて、「村落共同体」への

価値判断を考え直し、「共同体」の評価を肯定するようになった。2000年以降、日本政府は再び「町村合併」を促進して、町においては「まちづくり」、農村においては「村おこし」などを行ってきたが、そうした背景には上述のことがあった。

現在の日本農村では生産様式も変わり、町からの移住者もおり、村落は混住型のコミュニティとして描かれるようになってきている。しかし、私の調査した馬場村はそれほど大きな変化を経験していない。確かに生産様式は変わったし、土地の所有権は個人に属するようになり、農業は家庭を単位として営まれているが、しかし、村落にある社会組織の機能や、村落の伝統文化はよく保たれており、「村落共同体の姿」を垣間見ることができる。その理由は、馬場村「村民」の文化的なアイデンティティにあると思う。馬場村村民の文化的なアイデンティティは主に村の公的および私的なセレモニーに現れている。公的なセレモニーとは村の毎年の大祭りや正月行事を指し、私的なセレモニーとは個人による村人としての通過儀礼などを指すが、ここでは主に葬送儀礼を指すことにする。本論文は宮城県仙台秋保町にある葬式を研究対象とし、葬式が村の共同体を維持するメカニズムを明らかにしようとする。

葬送儀礼はこれまで日本の宗教学者、民俗学者、文化人類学者が関心を持ち続けてきた問題である。柳田国男は日本における葬儀習俗を研究した最初の学者の一人であり、彼のまとめた『葬送習俗語彙』から、日本人の生死観を見ることができる。彼の研究は後世に大きな影響を与えた。井之口章次は柳田国男に次ぐ重要人物であり、彼は『日本の葬式』において、日本各地の葬送の習わしの情報をまとめ、日本人の生死観や霊魂信仰を明らかにした。須藤功は『葬式—あの世への民俗』という写真集において、民俗学カメラマンのユニークな視点で日本の葬式の独特な光景を描いた。藤井正雄は『祖先祭祀の儀礼構造と民俗』において、祖先崇拜における日本式構造と日本人の潜在的な宗教の心性を強調した。五来重の『葬と供養』は日本の葬儀の習わしを全面的に述べた大作である。山折哲雄は『死の民俗学—日本人の死生観と葬送儀礼』において、「宗教思想家」の視点から、日本人の生死観や葬送儀礼について詳しく述べた。新谷尚記は『死と人生の民俗学』において、葬式は血縁、地縁、無縁（僧侶）と関わりがあり、死者の名残や死への恐怖の感情が混在すると述べた。竹田聰洲は『祖先崇拜』において、「年中行事の二大宗である正月礼・盆礼に同族間に特別の交際儀礼の行われる例であるが、また結婚や葬儀には当事者より同族の本家が儀礼全般を指揮し、葬儀には本家が喪家の主人に代わって、会葬者全部に礼を述べ、結婚に本家の承諾を得ないと不成立に終わるといような処も少なくない。一般に村落における婚儀や葬儀は決して婚家・喪家の儀礼ではなく、組とか親類とか、ともかく所属協同体の営為という形をとり、儀礼の要部はそれらの協同体が把握し…」と述べた（竹田聰洲 1982 : 29）。宮田登は『冠婚葬祭』において「日本地域社会には、古くから互助組織が発達している。たとえば葬儀の場合は葬式組とか葬式講が、組織として機能していると強調した。竹内利美は『村の行動』という文章において、「近世以後、死者の葬送追福のことは檀徒制の下、一応、寺院僧侶の所管に移ったが、しかしそれは供養だけのことで、葬送行事の実態は旧慣のまま多く村の手に残された。それゆえ、葬礼の執行は家行事というよりむしろ村行事といえるほど、多数の人々の労力と物質の供与を伴う合力組織を村ごとに作りあげた」と述べた（竹内利美 1984 : 294）。宮田登は『「世間

中の日本文化』において、葬儀には義理とか交際といった「世間」に付き合いの仕方が集約されているという指摘は確かである。葬儀に出席して義理を果たすということは、「世間」を支える人間関係を維持することであると述べた（宮田登 1997 : 25-26）。竹田聰洲以降の学者は集落の葬儀は喪家だけのことではなく、村全体のことだと言ってもいいと強調してきたが、以上は集落における葬式の基本的な状況である。

2000年以降、日本の学者は村落に対する研究を盛んに行っている。中西宏彰の『田舎暮らしにおける新規定住者と農村側住民の共住に関する研究』において、今日、団塊世代が定年を迎える中で、大澤は「1947～49年生まれの約680万人といわれる大量定年退職者の出現が2007年問題として取り上げられており、日本社会が受けるさまざまな影響、すなわちこの人口動態変化を農業再生に活かし得る道筋はあるのかどうかを考えよう」と指摘しているが、団塊世代を中心に約4割の勤労者は第二の人生として田舎暮らしを指向するという。都市住民が農村に定住することはその地域のコミュニティに参加することであり、地域資源管理や生活保全（消防団や葬式等）及び環境保全などの相互扶助が共住には必要とされるのではないだろうか。本論文では新規定住者が約4割を占める京都府南丹市美山町S集落の事例を取り上げ、新規定住者の実態（年齢、職業、家族構成、居住地など）を調査し、地域コミュニティへの参加と共住との関係を明らかにしたい」と述べられている（中西宏彰 2008 : 140-145）。ここからも、日本の学者が村新規定住者に注意を向けていることが分かるのである。

嶋根克己・黒沢眞里子・玉川貴子の『社会関係資本としての葬儀に関する比較社会研究』において、「葬儀は、故人や家族にとっての社会関係資本の現われであるという前提に本研究は立脚している。しかし葬儀の実施のされ方はそれぞれの地域や社会において多様性をもつ。したがって本研究は社会変動が著しいアジア地域の葬儀を欧米など先進国のそれと比較研究することにより、各社会における社会関係資本がどのように強化され交換されているか、葬儀の商業化がどの程度広まっているのか、などについて実証的に明らかにすることを目的としてきた」と述べた。日本の学者も葬儀の比較研究に力を入れていることがわかる。また、嶋根克己・玉川貴子の『戦後日本における葬儀と葬祭業の展開』においてでは、「経済成長、家族関係の変化、生活様式の近代化などの社会変動のなかで、葬送儀礼も大きく姿を変えつつある。遺族や親族のみならず地域共同体や職場共同体にとっての共同イベントであった葬儀は、個人主義化の進行や家族の独立化、孤立化の中で、家族主体で行われるようになっていった。その一方で、共同体が担ってきた葬儀実務を肩代わりするために専門的葬祭業者の出現は不可欠であった。しかし家族の絆が弱体化し、地域社会とのかかわりさえも薄れてきた現在、葬儀はますます縮小し家族や親族の中だけにおける私的な儀礼に姿を変えてきた」と述べた（嶋根克己 玉川貴子 2011 : 1）。しかし、筆者の調査した秋保地方の村の葬儀は以上のように言われた変化がそれほど見えなかった。

以上、日本の学者の葬儀と村社会についての研究をみてきた。日本の村の葬儀を論じる時、他の国を対照した場合、もっとはつきり明らかにできると思う。それゆえ、ここで中国の村の葬儀を少し紹介していくことにする。一口に中国と言っても、漢民族以外に五十五の少数民族があり、また同じ漢民族でも地方によって習慣も違うので、日本との比較研

究は簡単ではない。筆者は特に中日の比較研究をするつもりはないが、ただ日本の学者と中国国内の学者における中国の村の葬式の研究成果を幾つかを紹介して、日本の村の葬儀事情をもっと明らかにできるのではないかと考えている。

中国の学者の中で、肖坤冰、彭兆栄の『漢民族喪葬儀式中对“运”平衡观念的处理—对川中地区喪葬儀式中“找中线”环节的分析』では、四川省中部地方の葬儀の事例を通して、葬儀で民間は「中心線」を探すことで先祖と子孫、及び祖先祭祀グループの間柄のバランスをとることを明らかにしている。四川省中部地方の「中心線」を探すことを葬儀の時大事にするのは、人々の先祖がもたらす「福佑」の信仰にある。人々は先祖の亡霊が子孫の庇護に役に立つと信じている（肖坤冰、彭兆栄 2009 : 179）。繆自鋒の『裕固族喪葬儀式及其文化内涵』では、機能主義の視角で葬儀の分析を行い、ユグル族の葬儀では親族の死者に対する恋しさと死に対する恐怖を現していることを明らかにした。ユグル族は靈魂が肉体から独立して、死後にも生命が継続できると信じており、葬式は文化の記憶と歴史の伝承の機能、および子孫への教育機能がある。この世とあの世の均衡状態を保つことができ、エスニックグループの調和と認知システムを維持するメカニズムがあると述べている（繆自鋒 2010 : 44）。

本論文では、村落の葬式を研究対象にして、村落における伝統文化はいかに「村落共同体」を維持していくのかを明らかにしようとする。本論文での「村落共同体」とは単なる伝統的な「村落共同体」ではなく、「コミュニティ」化による再編のなかで「共同体」の精神を持つ「村落共同体」である。馬場村はある程度、昔の「村落共同体」精神を保っていると考えられ、また、普通の「コミュニティ」とは区別すべきものである。

筆者は 2010 年 8 月から翌年 8 月まで、日本の仙台市の秋保町の馬場字で 1 年間にわたってフィールド調査をした。日本村落の葬式の研究を通して、「村民」の共同体意識の強弱がわかると考えている。ここでの「村民」は普通の意味での「村民」ではなく、村に居住するすべての人を指すことにする。調査によると、馬場村の「村民」の共同体意識は依然として強いようである。それは村の伝統を維持する原動力だと思う。馬場村の研究結果がどれほど日本の村落を代表することができるかわからないが、少なくとも日本の村の一つのパターンと言って差し支えないだろう。

2. 秋 保 町 馬 場 字

(1) 秋 保 町

筆者のフィールド調査の地点は宮城県仙台市秋保町馬場字である。秋保町は湯元字、境野字、長袋字、馬場字の 4 つの字（制度村）から構成される。秋保町は北緯 38 度 15 分 40 秒、東経 140 度 35 分 38 秒のところであり、本地域は標高が 150～300 メートルの山麓丘陵地帯である。南部は柴田郡川崎町に、北部は宮城郡宮城町に、西部は山形県の山形市に、そして東は仙台市に隣接している。車で 40 分で仙台の都心に行けるが、筆者の主要交通手段である原付きでは 1 時間ぐらいかかる。秋保町は東西が 24.5 キロメートル、南北は 12.2 キロの L 字形をしている。総面積は 14658 ヘクタールである。耕地面積は東半分と中央の名取川溪穀の川岸段地帯に集中している。農業がこの町の主な産業であり、人

口の大部分は農業に携わっている。1955年の農家は614戸であり、人口4058人であった。そのうち農業就業者は1611人であった。農業従業人口は以前より著しく減少した。当時の戸別の耕地面積は1.53ヘクタールほどであった。日本農林省2010年の農業センサスによると、秋保町の面積は14.5平方キロメートル、人口4425人、戸数1759戸である。農家の総数は333戸であり、そのうち販売農家は231戸、飯米農家は102戸であった。当地に居住する非農家は93戸である。秋保町はもともと同族村が拡大してできたものようである。秋保町は4つの村(字)から構成されるが、しかしそれらの間の連絡は非常に密接であり、7、80歳の人の婚姻圏は秋保にあり、秋保町の農家の殆どは親戚や友人の間柄である。明治以降、4つの村は秋保「村」に統合され、それがいわゆる今の秋保町を構成している。秋保神社には地域共通の氏神が祀られている。各村の村民は秋保神社の氏子であり、秋保神社は彼らの共同の鎮守である。共同の文化的アイデンティティと血縁関係は地元の人間関係のきずななのである。

(2) 馬場村

馬場村(字、203戸)は行政村であり、駅村落(61戸)、野口村落(61戸)、滝元村落(43戸)、野尻村落(38戸)の4つの自然村から構成されている。すべての集落はそれぞれ特徴があるが、しかし、それらは切っても切れないかかわりがある。村落と村落の間に多く婚姻関係があるばかりでなく、お互いに田んぼも繋がっている。明治維新以前、駅集落と野口集落の共同祭りの場所は、馬場集落の愛宕神社であった。愛宕神社にはそれらの共通の氏神が祀られていた。明治維新以後、愛宕神社は秋保神社に統合された。しかし、地元の人々の伝統的な習慣は依然として続いている。毎年6月、愛宕神社で祭りが行われる時、駅と野口の農家の代表が必ず参加し、愛宕神社は依然として彼らの親しい関係の象徴になっている。もちろん愛宕神社の祭りは以前ほど盛大ではなく、参加する人も前ほど多くない。しかし、集落の他の社会組織はやはり機能している。例えば、農業実践組合などである。したがって彼らのお互いの往来は途切れていない。また、本村の前の世代の人々の婚姻圏は基本的に秋保町内にある。地元の人々の結婚する相手のほとんどは秋保町内の人であった。当時は村内の婚姻が盛んであった。村民の目からすれば集落、村、町は殆ど同じようなものである。それは彼らのよく知っている社会であり、そこは彼らの仲間がいる社会である。昔、すべての集落には「講」、「組」、「結(ユイ)」などの組織があった。しかも活動が活発であり、村民はお互いに密接な関係を維持していた。すべての集落は幾つかの大家族で構成され、その大家族は集落の社会組織をコントロールし、集落内の関係をいっそう密接なものとした。集落は民主主義思想の浸透につれて、村長、つまり今の町内会会長も、家柄と関係なく、順番に担当することとなった。集落内部の家族関係は集落の管理にあまり干渉せず、概ね仲良く暮らしている。馬場村の範囲内には寺が二つある。一つは西光寺であり、もう一つは大云寺である。村人はすべてこの二つの寺の檀家である。西光寺の檀家は大云寺より少し多い。集落は各自の特徴と発展の歴史がある。明治維新以降、集落は過去のように独立した存在ではなくなった。にもかかわらず、それらはそれぞれの独特な文化を維持した上で、村の元の枠組みをもとにして、もっと広範囲の共同体を形成した。本地域を管理する部門は宮城県仙台市の末端組織—秋保総合支

所であり、それは中国の郷政府に相当する。しかし、支所の管理は直接集落の事に介入せず、村の自治に任せ、専ら村の自治にサービスを提供し、国の方針、政策を宣伝する役を果たしている。村には村の町内会長がいるが、村の町内会長は各集落の町内会長を統轄するだけである。実際に役割を果たすのは集落の町内会長である。ここに住む新しく村に入ってきた人もこの人間関係のネットワークに巻き込まれ、村にすでにあった文化は村に住んでいる人に影響を与えている。

3. 村の社会組織

(1) 伝統的な組織

日本の村の伝統的な人間関係には、血縁関係のほかに、各社会組織により築かれた関係もある。日本の農村社会には江戸時代から、「講」という組織が多くあった。「講」は本来仏教経典を解釈する法会であるが、後には、同じ信仰で結合した組織も「講」と呼ばれるようになった。「講」の種類はたくさんある。秋保地区の「講」はほぼ以下の通りである。(1) 他地域の神社やお寺を信仰対象とした「講」、例えば、三山講、伊勢講、金華山講、古峰講などである。(2) 内部の神社や寺を信仰対象とした「講」。例えば、薬劑師講、愛宕講、産土神講、秋葉山講、子安観音講である。(3) 特定の神社や寺に属しない「講」。例えば、念仏講、百万遍講、馬頭観音講などである。(4) 経済上の互助を目的とした「講」。例えば、葬儀講、屋根葺講、炊飯講、地藏講である。(5) 契約講。例えば、戸主会、青年契約講。馬場村の愛宕講、蒼前講、葬儀講、屋根葺講などである。馬場村の滝元集落契約と野尻集落契約講の成立はわりと早い。以前、集落には「結」という組織もあった。しかし今、これらの組織のほとんどは歴史の舞台から引退した。ただ青年団、水利組合、農協、町内会、近隣組などがまだ活躍している。筆者はその近隣組が村民といっそう密接に関係し、村人の感情の絆になっていると考えている。

(2) 近隣組

日本は江戸時代から、集落に地域組織が設置されていた。集落は2つ以上の地域組織を重層的にもつ場合が多い。その一つは村組であり、もう一つは近隣組である。村組は近隣組より規模が大きい。近隣組は村組の地域範囲内に含まれる。しかし、それらはそれぞれ機能の違う独立組織であり、取り扱う仕事は違う。村組は集落をいくつかの地域区に分ける。村組は普通、集落内部にある道路や水路によって分けられている。その区分は村落の規模によって大きさが違う。ある集落には村組が3、4くらいあるが、ある村には村組が2つだけである。村組は道路や水路を境にして、各組の規模と戸数もそれぞれ違う。村組は原則として集落内部の必要によって設立されるのであるが、その組織はところによって呼び方が違う。東北地方では「屋敷」というが、ある地方では「垣内」という。そして別の地方では「門」、「庭」という。「屋敷」、「垣内」、「門」、「庭」などの呼称は現在では「屋敷」と呼ばれることが多い。また、集落の位置により上、中、下などの名称で村組を呼ぶところもある。村組は集落内をいくつかの区域に分ける組織であるが、近隣組は何軒かの家を一緒にくくる組織である。それは国家が村落を管理するために設立したも

のなので、村組とは明らかに違う。近隣組の中で最も代表性のあるのは近世の「5人組」や、明治初年の「5人組」と「戦時体制の下にある隣組などである。それらはすべて政府の介入で成立した制度的な組織である。その組織は共通性が強く、地方の差異性が小さい。最初、近隣組は主に互いに連帯保証、相互監督、政府の意志伝達、民意反映、租税徴収などの機能を果たす、行政機能が強いものであった。その後、時間がしばらく経つと、生活上における互助の機能が始まった。今、近隣組は法律上の規定が解除されたが、しかし、集落の内部組織として相変わらず機能を果たしている。一般の集落の村組の中には近隣組がいくつかある。近隣組の役割は葬送儀礼を行う時、明確に示される。近隣組の存在は村人同士の温情を維持している。仙台市にいる友人は筆者に次のように話した。「今は、家にいても、とてもつまらない。近所同士に会っても、ただ遠慮がちな挨拶するだけで、何の付き合いもない、街の町内会も殆どイベントとか行わない。もし自分には何の趣味もなく、何の組織にも参加しないとすると、都市で暮らすことはとても孤独なことです」。彼女のいう話は、筆者も実感できる。生きている人だけではなく、死んだ人も都市部と農村部では違う。農村の葬式はすべて盛大に行われる。生前、たいしたことをしなかった人でも、死んだら、家族や村人たちはその人の霊に対しても感動的なほどの葬儀を行う。村の人は葬儀に参加できる人は殆ど参加する。筆者は数回の葬儀に参加したが、参列者は毎回100人以上であった。多い場合は数百人もいた。逆に、筆者が市内で見た光景はとても寂しいものであった。町では普通、死者の家族は葬儀社に委託して、それほど儀式を盛大にしない。村の葬儀は、参列者が多いばかりではなく、必ず儀式を盛大に行う。必ず僧侶を呼んで来て、念仏をさせる。村の村長に当たる人や町内会長が弔辞を読むのも普通である。

4. 日本の葬式の習わし

日本農村の葬式は基本的に仏教式を取る。式は普通お金を払って、農協の葬儀センターやその他の専門の葬儀会社に委託して取りしきる。葬式は納棺と通夜から始まる。村ではだれかが亡くなったら、まずすぐ村の親戚と近隣組に知らせる。親戚や近隣組の人が揃ってから、「湯灌」の儀式が始まり、遺体を棺に安置する。その後、暫くして葬儀社の人がある。彼らは喪家で祭壇を造って、通夜の準備をする。喪家は檀那寺から僧侶を呼んで、枕経をあげてもらうのが一般的である。経を読んでもらってから、家族の人や親戚たちは死者の傍で食事をする。その後、徹夜で点燈し、焼香して、通夜に入る。通夜は死者と生者が最後に一緒にいる機会である。葬式は通夜後の翌日に行われる。普通親族と関係のある人だけが参加する。葬式は普通、仏式である。葬送の時、喪家の喪主が松明を持って、葬送行列の先頭に歩く。後継者（通常は長男）は位牌と遺骨箱を持って、その後につく。妻は供物を持って後継者の後につく。日本の農村では、人が亡くなったら、村民は弔間に行き、喪家の人たちと一緒に食事をし、香典を送る習慣がある。今の香典は現金であるが、以前は米であった。もしその死者の生前の人付き合いがよければ、葬式の時に、家の庭にたくさんの米袋が積まれたという。葬式において日本社会の「義理人情」と交際の「世間規則」が現れる。日本人は葬式をととても大事にする。普通家族の人がそれらの事が済んだら、親戚や村人たちは香典を持って来る。近隣組の人々は喪家の代わりに来客を接待したり、香典帳簿を作ったりして、喪家の「枕飯」を食べる。「枕飯」は喪に服するご

飯である。また、湯灌と納棺に参加する人、墓を掘る人も「枕飯」を食べる。日本の葬儀風習は日本の農村において十分保存されている。葬儀自体の礼儀作法や葬儀の参列者のすべきことや葬式の司会を誰がするなどの一連の問題から村人の人間関係と集落の社会組織の役割がよく見える。葬式の状況からその集落の完全性も分かる。彼らの祖霊信仰では死者を祭ることを怠ってはいけない。したがって、彼らは死者の葬儀をなるべく盛大に行って、その魂を鎮め、早く祖神になって、家族を守らせる狙いがある。筆者は秋保町馬場村で数戸の葬式に参加した。日本の伝統的な葬儀や社会組織について深く理解することができた。一言で言えば、日本式の葬式は、宗教の流派と地域によって少し差異があるが、普通、家族成員は誰か死んだら、すぐ「枕経式」を行い、その後、体を清めて、納棺し、通夜式を行う。翌日から葬儀・告別式が行われる。その後、火葬か土葬（今はない）をする。今、葬式に参加する人は皆忙しい。したがって、ある家は葬儀場で葬儀を行う。ある家は死者の死体を茶毘に付してから、途中で所属の寺（菩提寺）に立ち寄る時、ついでに葬儀を行う。しかし、殆どの家は死者の遺骨を回収した後に、葬送式を行っている。一般のプログラムは村長が弔辞を読み上げてから、僧侶は経を読み、つづいて司会者は弔電を読む。その後、遺族の焼香となり、僧侶が退場する。喪主はお礼をいう。遺体の告別をする。納棺は、6人の男性が棺を担ぎ込んで、霊柩車に入れて、火葬に送る。これは日本の普通の葬式である。しかし筆者が秋保町で見たケースは上記のプロセスとまったく同じとは言えない。筆者の見た例は、基本的には通夜の翌日の午前、死体を斎場で茶毘に付し、その後すぐ遺骨を回収し、午前11時過ぎに葬式が始まった。葬式の多くは、死者の家で遺骨の前で行う。

5. 馬場村の葬式

事例1：馬場〇家の葬儀式

故主の〇は女性であり、享年103歳である。死者の家は何世代もこの村の医者として活躍した。1945年以降、日本は農地改革を実行した。〇家は農地を少しもつようになつた。それまではずっと医者を生業としてきた。〇家の行った葬儀は伝統的な農村の葬



式である。葬式を取り仕切る人の3分の1の人は

〇家の人である。10人くらいは近隣組メンバーである。農協の葬儀センターのスタッフもいる。家族の人は基本的に葬式内部のことをするが、近隣組の男性は葬式に参加する人の受付をする。女性は料理の手伝いをする。農協の葬儀センターの専任担当者は葬式の事務を担当し、喪主の要求に応じて、葬儀サービスを提供する。

秋保町馬場字の〇家の葬送（作者撮影）

求める規模と贅沢さの程度によって費用が違う。〇家の葬式は中等のレベルなので、300万円以上かかったという。参列者は大体三種類の人である。一部分は死者の親族であり、一部分は近隣組の代表であり、もう一部分は死者の生前の親友や地元のさまざまな組織の代表である。仙台農協理事長は弔問書と花輪を送った。地元出身の各級の議会議員も

弔問書を送った。葬式に参加する親族団は 40 人ぐらいである。関係者の代表や死者の生前の親友などは 40 人余りある。近隣組は 20 人ぐらいが参加した。葬式は 3 時間以上にわたって行われた。農協のスタッフが司会をし、死者の檀那寺の秋保瀑布不動尊の僧侶に経を読んでもらった。死者は秋保瀑布不動尊の檀家なので、葬式は秋保瀑布不動尊の僧侶に祈祷をさせたのである。葬式に参加する人は香典を払う習慣がある。香典とはすなわち葬儀に持参する現金である。親戚は 1 万円であり、近隣組は 5000 円であり、普通の来賓は 3000 円である。来賓は死者に黙祷するばかりでなく、順番に線香に火を付け、その後、粉末状のお香を香炉に「焼香」する。式が終わると、普通の来賓は退場する。ただ、近隣組の男性メンバーや遺族だけがそのまま残る。最後、近隣組の男子一人が旗を押し立て、別の者が竿で麦わら帽子を突き、また別の者が銅鑼を鳴らして、彼らを先頭に家族らは行列を作って、墓地に移動する。死者骨箱や写真を抱くのは長男である。女性は一律白い三角巾を頸に巻く。「O家」の墓地に来ると、すべての人は墓地の広々とした所で時計の指針方向に沿って 7 度回った後、納骨箱を自家の墓に安置した。納骨箱の安置は職人に任せ、親族たちは墓を囲んで、静かに安置の過程を見るだけであった。全体のプロセスは厳かだしめやかであった。式はかつての姿をそのまま保っている。

筆者は自分の目で現地の葬式を見る以前に、既に関連文献で読んだことがあったから、秋保町馬場村の葬式の内容について予備知識があったが、この葬式の全過程を目撃し、あらためて彼らの伝統的な民俗文化を完璧に保っている行動に感動した。村の葬儀は明らかに都市の葬儀とは違う。村の葬式は盛大であり、溢れる人間味が感じられる。私は友人の H 氏に案内してもらって、仙台市の葬儀場（斎場）を見学したことがある。その時、見た告別式の光景はいかにも寂しいものであった。筆者に深い印象が残ったのは O 家の子孫が葬儀の時述べた感謝の言葉である。喪主は会葬者一同に死者への生前の思いやりを感謝するほかに、何回も繰り返して、亡き家族にも今後ともよろしくとお願いした。日本の村落の葬式は死者への見送りだけではなくて、更に重要なのは生者と生者の対話だと思われる。ある村民は筆者に次のように話した。「近所の葬式には私は全部参加します。それは死者への哀悼の外に、近隣関係を維持したいからだし、他人にもこれから我が家に葬式があった時に参加してほしいからです。私たちが死んだら、私たちの葬式に他人が参加してほしいです。今私たちが他人の葬式に参加するのを止めると、今後他人は私たちの葬式に参加しなくなるでしょう。自分の死後の葬儀を盛大に行いたいなら他人の葬式に参加しなければなりません。これは村のマナーです」。これは 1 種の互惠の思想である。この空間の人間にはお互いに誰も離れられないという思想である。村の共同体はこのような思想で支えられ、維持されてきたのである。今回の葬儀には筆者は馴染みの人に何人か出会った。中には純粋な農家もいるし、後から村に入った非農家もいる。今回の観察を通して、筆者は農家と非農家を含む村人が全部村の社会組織のメンバーだということを知った。彼らは村の共同生活のネットワークの中に編み込まれていて、互いに協力して暮らしている。葬式は彼らの最も良い絆の一つだと感じられる。

事例 2 : T 氏の葬送式

死者の T 氏は享年 86 歳である。その葬式は 12 時から始まった。場所は馬場村の大云

寺である。大云寺は曹洞宗に属し、死者はその檀家であり、生前は魚屋を営んでいた。古くからの住民であった。息子たちは仙台市内に勤めている。長男は彼と一緒に住んで、仙台の市役所に勤めている。彼は生前地元の社会活動によく参加した。かつて秋保町長袋村大原集落の町内会長になったことがあり、人付き合いがよく、家庭状況もよかった。大云



寺で行った葬儀の参列者は 80 人ぐらいである。近隣組のメンバー、親族、過去一緒に社会活動に参加した友人、そして他の友人がたくさん来た。秋保神社の宮司も含め、来ることのできる村人は殆ど参加していた。具体的に葬儀を実施したのは仙台の「清月記」という葬儀社である。その会社の一度のサービス料金は普通 160 万円ぐらいである。

秋保町の T 氏葬送式（作者撮影）

この家の葬儀は比較的に豪華な葬儀だと言われた。しかし、基本形式は家でやるのとあまり変わらない。前回見た葬式は死者の家で行ったのであるが、今回の葬式が行われた場所はお寺である。しかし、その全体のプロセスは筆者が前回見たものと殆ど同じであった。死者は農家ではなく、魚屋であるが、何代も秋保町に住み続け、秋保町の古い住民なので、死後、秋保町の人からの厚い待遇を受けた。葬儀で馬場村の N 氏に出会った。彼は村の活動家としていくつかの村組織に職がある。彼は私に次のように話した。「私はもう 70 歳になり、多くの人の葬式に参加した。村の葬儀は基本的に村のすべての家族が参加者を出すわけです。その伝統は現在でもほとんど変わっていない。村の人たちは全部親戚とは言えないけど、みんな親戚のように付き合っている。村の人たちは死者の葬式に参加するはかりでなく、さらに死者の喪に服する」。彼の話聞いて、筆者は馬場村の NH 氏を思い出した。NH 氏の奥さんは 2010 年に亡くなったが、村は彼女のために一年ほど喪に服し、その年の多くの行事は簡略化されたものであった。

事例 3：滝原の S 家の葬式

死者は S 家の本家の母であり、享年は 92 歳であった。参列者は本村の分家以外にも、他の家の人もたくさんいた。他の村の人も少なくない。この家は大家族なので、親戚は本村以外にもたくさんおり、また死者の夫は、生前、本村農業委員会のメンバーであり、人付き合いがよかったとのことであった。実家は馬場村の駅の NH 家である。今の家は本村の S 家の本家なので、来る人はとても多かった。

葬儀の場で筆者は多くの知人に会った。この家の葬式に参加してみると、あらためて秋保町内の重層構造的¹ 特徴を感じた。すなわち、現在秋保町に住む人の生活圏は秋保町に



あり、生産圏は村落にあり、就職圏は仙台市にある。昔、ここの人々の生産、生活圏は秋保町にあり、婚姻圏も秋保町にあった。したがって、秋保町の周囲数十キロの範囲ではお互いに親戚と呼ばれる人が多い。ここの人々はみんな知り合いなのである。今回の葬式で筆者はたくさんの知人に会った。30年前、関東地方の群馬県からここに移ったH氏の妻に逢った。彼女は私に次のように話した。

秋保町滝原のS家の葬送式（作者撮影）

「私と夫はともに都会の出身であり、40年前に馬場村の山向こうにある丸紅の養鶏場で働いたことがあり、その後仕事をやめて、ここで土地を買って、自分の養鶏場をつくった。30年間、この村の人々と仲良く付き合ってきた。村民は私たちをよそ者として扱わなかった。先日夫が亡くなったが、村の人は盛大な葬式を行ってくれた」。

事例4：野尻のK家の葬式

死者は馬場村野尻集落のK家の主人であり、享年は85歳である。生前は本村の大工であった。彼の子供は本村の村民と結婚したのもいるし、村を離れたのもいる。大工は生前、村人との付き合いがよく、誰もが家をつくる時この大工の世話になった。したがって、村の殆どの人は彼の葬儀に出た。この葬儀に来た人の中にも筆者のよく知っている人が少なくない。村の近隣組の男性は来賓の受付を担当する。女性は料理の手伝いをする。葬儀に来る人の中には、東京からここに来て、部屋を借りて、生活している彫刻家SZ氏の奥さんもいる。SZ氏は15年前から秋保の長袋村大原集落に移住してSさんの家を借りて、住み着いた。ここはSZ家の生活の場でもあるし、仕事の場でもある。SZ氏はこ



こで漆器と家具をつくる。奥さんは大滝の向こうの店で夫のつくったものを売る。SZ氏夫婦は、ここに来て、とても満足しているという。奥さんは私に次のように話した。「私たちは十数年前から、ここで暮らし始めた。死者は私たちのお隣です。しかも大工なので、うちの主人は彫刻をしているから、同業者といってもいいです。普段は付き合い合う機会が少ないですが、この葬儀に参加しないわけには行きません。

秋保町野尻のk家の葬送式（作者撮影）

郷に入れば郷に従えで、私たちは村民とあまり距離を置かないように努力しています。完

¹ 秋保町一馬場字一4つの小字というような層

全に村の大家族に溶け込みたいと思っています」。

6 . 葬 送 の 儀 式 と 村 の 共 同 体

筆者は馬場村の調査をする前に、仙台の民俗に関する資料をいろいろ調べた。多くの資料に秋保町馬場村の伝統的な葬儀を紹介する内容のものがある。そのうち、筆者の見た一枚の1980年に撮られた葬儀の写真は筆者の馬場で見た場面とそっくりであった。秋保町の調査において、筆者が特に感じるのは村の葬儀の形が変わっていないばかりでなく、参列者の意識も変わっていないことである。筆者は後に村に入った「村民」も含む多くの村民に接触したが、彼らは誰の葬式にも参加する。このような経験を何度もして、筆者はあらためて日本の村の葬儀は喪家だけのことではなく、村全体のことだと感じた。ある喪家の代表は参列者たちに感謝する時、次のように言った。「他人の葬儀に参加することはただその死者の霊を慰めるだけではなく、さらに生きている人の励ましにもなる」。筆者は多くの葬儀に参列する人と交流したが、彼らも同じ認識である。馬場駅のNさんの話では、自分が他家の葬式に参加することの背後には、他人も自家の葬儀に参加してもらいたいという気持ちがある。こうした理由を背景として、筆者の見た葬儀はどれも盛大に行われたのである。もちろん、村の名望家の葬式はもっと盛大である。日本人には祖先崇拜の信仰があり、人は死んだら、肉体を取り返すことはできない代わりに、魂が昇華できると信じているとされる。もし生きている人が死者をよく供養すれば、死者の魂が早く祖霊になることができ、家の繁栄を守ってくれると信じられている。筆者は上述した数回の葬式で、ある人には毎回出会った。葬儀では、親戚としての責任から逃れることができない。葬儀は人情を表出する最大の機会なので、村人たちは皆この機会を失いたくない。他人に「人情」を示すことで、他人から人情をもらえる。これは日本の社会の中で最も重要とされる「義理人情」の一つだと思われる。したがって、村の葬儀はすべて盛大に行われ、参列者は普通100人を下らない。その上、葬儀は終始厳かだしめやかに進行し、全て伝統的なやり方で厳格に行われる。プロセスはいずれの葬式も基本的に同じである。親戚はもちろん、近隣組のメンバーも必ず手伝いに来る。ある村では家々全てが代表を出して、弔問に来る。村落のさまざまな組織の責任者も必ず参加しに来る。農協の代表も参加に来る。したがって、筆者には村の葬儀は村民同士の最も重要なきずなだと思われ、村の統合の力の一つだと思われる。いつもは静かな村も、葬儀となると、数百人の参列者が集まってくる。この点から見る限り、日本の村にはまだまだ強い凝集力がまだあると筆者には思われる。

お わ り に

馬場村はある程度、昔の「村落共同体」精神を保っているのだから、普通の村とちょっと違う。筆者は2010年、日本の仙台市の秋保町の馬場村において一年間にわたって、フィールド調査をした。筆者は秋保町馬場村の愛宕神社の祭祀活動、馬場集落のお盆祭り、秋保神社列大祭、馬場村の葬式、正月の新年会、秋保祭りなどを含む、一年中の活動にほとんど参加した。その中で筆者に最も深い印象が残ったのは、村の葬式であった。馬場村の葬儀では「村民」の互助関係が十分現れている。本論において村落における新規定住者を

「村民」として扱うことにした。それらの新村民も郷に入れば、郷に従えという姿勢で村の葬式に参加する。したがって、馬場村の伝統的な社会構造は殆ど変わっていない。村の中で最も稲作農業を反映する水利組織も存在しているし、村の伝統文化も存在しているし、特に葬送儀礼はそのまま保存されている。「村民」の共同体のアイデンティティも殆ど変わっていない。葬式は村人の村に対する共同体的アイデンティティを維持する力の一つになり、その社会構造を安定させることに寄与していると考えられる。筆者は村落に葬式文化がそのまま生存していることは日本農村の「共同体」を維持する、重要な要素の一つであり、葬式の文化は村民の感情を繋ぐ絆の一つだと思う。日本において葬儀式を盛大に行うことは、親孝行と祖先の庇護を求めるだけでなく、村の「共同体」を維持するメカニズムもあると思う。日本の農村において、伝統文化はやはりある程度、新規定住者も含む村の人々の行動に影響を与えていることが調査によってわかった。

付 記

本稿は、平成22年度国際交流基金日本研究フェローシップ事業におけるフェローとして、「現代日本における農家と社会—秋保町馬場村の調査を中心に」についてのプロジェクトに関するものであり、国際交流基金の22RE425の助成を受けたものである。

参 考 文 献

<日本語>

- 1) 鳥越皓之（2007）：『村の社会を研究するフィールドからの発想』東京：農文協。
- 2) 井之口章次（1977）：『日本の葬式』東京：築摩書房。
- 3) 五来重（1992）：『葬と供養』東京：東方出版。
- 4) 嶋根克己玉川・貴子（2011）：「戦後日本における葬儀と葬祭業の展開」、専修大学「専修人間科学論集」2011年3月第1巻第2号。
- 5) 嶋根克己・黒沢眞里子・玉川貴子：研究課題『社会関係資本としての葬儀に関する比較社会研究』研究期間：2010年4月1日～2013年3月31日。
- 6) 須藤功（1996）：『葬式—あの世への民俗』東京：青弓社。
- 7) 竹内利美（1984）：「村の行動」『日本民俗文化大系第八巻村と村人』東京：小学館。
- 8) 竹田聴洲（1982）：『祖先崇拜』京都：平楽寺書店
- 9) 中西宏彰（2008）：「田舎暮らしにおける新規定住者と農村側住民の共住に関する研究」、富民協会『農林業問題研究』44(1)：140-145。
- 10) 新谷尚記（1995）『死と人生の民俗学』東京：曜曜社出版。
- 11) 藤井正雄（1993）：『祖先祭祀儀式の構造や民俗』東京：弘文堂。

- 12) 宮田登（1999）：『冠婚葬祭』東京：岩波新書。
- 13) 宮本登（1997）：『談合と贈与』東京：小学館。
- 14) 平重道監修（1976）：『秋保町史』秋保町史編纂委員会編纂、宮城県名取郡秋保町発行：2－3。
- 15) 柳田国男（1984）：『葬送習俗語彙』東京：国書刊行会。
- 16) 山田七絵（2012）「中国農村における組織かメカニズム」重富真一・岡本郁子編『アジア農村における地域社会の組織形成メカニズム』．調査研究報告書 2012年1月 第1章。

<中国語>

- 1) 肖坤冰, 彭兆荣（2009）：《汉民族丧葬仪式中对“运”平衡观念的处理—对川中地区丧葬仪式中“找中线”环节的分析》 《民俗研究》 2009年第1期
- 2) 繆自鋒（2010）：《裕固族丧葬仪式及其文化内涵》 《学理论》 2010年第8期

作者：李晶（1958.4） 広東海洋大学外国語学院教授（人類学博士）

電子私書箱：yanada58@hotmail.com